

論文の内容の要旨

論文題目：ユートピア都市の書法——クロード=ニコラ・ルドゥの建築思想

小澤京子

クロード=ニコラ・ルドゥ（1736-1806年）は、フランス革命期に数奇な運命を辿った「呪われた建築家」として、^{ヴィジヨネール}幻視者として、あるいはモダニズム建築の予告者として、神話化された存在である。彼は世界遺産「アルケ=スナンの王立製塩所」設計者であり、『芸術、慣習、法制との関係の下に考察された建築』（1804年、以下『建築論』と略称）でも知られている。その建築思想は、絶対王制下での「国王の建築家」から新しい社会のための都市構想へと、まさに時代の転回点を画している。

本論文はルドゥのモノグラフィであるが、彼の建築構想や言説に存在する特異的な性質——「建築の起源」としての幾何学性志向、「建築の^{カラクテール}性格」概念の具現の仕方、都市構想における性愛の契機、書物の構造が出来させる仮構的な空間性、建築家の自己表象としての造物主、そして眼というイメージ——に焦点を当て分析を行なっている。ルドゥの固有性は、「幻視の建築家」といった後世の呼称が喚起する印象とは異なり、彼の生きた時代から完全に乖離したものでは決してない。むしろ、その特異性のうちに、同時代の、あるいは次に来るべき時代の性質が映し出されている。本論文は、このルドゥにおける特異性と反映性を言語化し分析するものであり、先述のテーマティックは、同時代の思考体系における布置を描き出す上で必然的に導き出されたものである。もっともここで言う「反映」とは、同時代の文脈に解釈の根拠を求めるような、単純な還元主義とは異なる。ルドゥの作品は、同時代の思

潮に与しつつも、そこから離反する要素をも併せ持つ。かような点に着目し分析することで、ルドゥの生きた新古典主義、啓蒙主義、フランス革命を挟む数十年間という時代における認識の枠組と欲望の態様との関係を浮かび上がらせるのが、本論文の方法である。序論ではこのような本論文独自の方法を、先行研究との比較を通じて明示したうえで、ルドゥの生涯を概観した。

第1部では、ルドゥの建築構想の「文字」、「言語」としての性質を扱う。第1章では、ルドゥの言う「建築のアルファベット」、すなわち建築を基礎的構成単位にまで還元し、純粋幾何学図形を組合せの基本ユニットと見なす発想を分析した。ルドゥは建築術を、書記素の組合せによって総体を構築する綴字法に準える。これは建築の起源ないし元型の探究という同時代の潮流に与するが、また普遍言語の探究という知的営為とも関連するものだった。

第2章では、「建築のアルファベット」の中でもとりわけルドゥが重視した球体と円形に焦点を当てた。ルドゥにとってこの二つの形態は、純粋性への還元であり、組合せの基礎単位であると同時に、伝統的な象徴性を帯びたものでもある。さらに半円形の平面図は、古代ローマ劇場の再現と一望監視装置という、二つの系譜に連なる。王立製塩所や「ショーの理想都市」計画案にも現れるこの半円形という形態は、同じ形態の「建築のアルファベット」ながら、視覚の平等性、監視による権力的支配、さらには見ることと視線が遮られることの性的な意味合いなど、それぞれ相異なるベクトルを持っている。

第3章では、「建築のアルファベット」の組合せ術が、第1章で言及した^{アルス・コンビナトリア}結合術としてのアナグラムに、ときにバロック的な具象形態や古典古代風のモチーフも加えることによって、異種混淆的な「綴字法」となっていることを示した。これは、第2部で言及する「怪物的」な建築とも通底する。

次いで第4章では、シニフィエを持たない書記素という性質を離れて、形態がその意味の解説を誘うような、^{キャラクター}「表意文字」ないし「ヒエログリフ／エンブレム」としての「建築の文字性」が、ルドゥにあることを指摘した。それは「眼」として立ち現れる形態であり、これは本部第2章で触れた視線の問題、また第5部で触れるテーマ系とも関わりあっている。

ルドゥにおける建築の「文字」性、「言語」性とは、決して純粋な元型としての基礎的書記要素や、あるいは意味の透明かつ一義的な伝達に資するような「語る建築」の側面にあるのではない。むしろ断絶や混濁、一義的に解釈できないがゆえに解説を誘うような謎がそこには差し挟まれている、というのが、第1部の結論である。

第2部では、建築の表層に現れ出た外観とその^{キャラクター}性格との対応関係という、建築のいわば「観相学」を巡る問題を扱った。ルドゥの建築構想は後世、「語る建築」と呼ばれた。この命

名は、しかしまた新古典主義時代の建築理論、すなわち「建築物の視覚的形態はその性格^{キャラクター}を伝達すべし」という規範を表している。第1章では、この「建築の性格^{キャラクター}」の表出を巡る議論と観相学体系との通底性、およびルドゥ自身も観相学や「情念」に強い関心を寄せていたこと、さらにルドゥの建築物の表層における「装飾」とその不存在としての「沈黙」の問題を論じた。

次いで第2章では、18世紀には「キャラクター」は身分制秩序内での振舞いと内面の連関、内的な情念の外部表出の問題、あるいは外観の徴表に基づく自然史上の分類概念と、幅広い射程を有する概念となっていたこと、それが「建築の性格^{キャラクター}」の議論と通底し合っていることを示した。ここではいずれも、外部や表層における内的なものの発現態様、あるいは外観から不可視の内部を読み取る方法が問われた。ルドゥの作品はこのような同時代の思潮を一面においては反映しつつも、次第に観相学の約定を外れ、怪物^{モンスター}／畸形的と形容される混淆物を生み出してしまう。この「怪物^{モンスター}／畸形」は、「建築の性格^{キャラクター}」や観相学を支えていた「適合性^{コンヴァナンス}」が崩壊し、「沈黙」や情念の過剰による混淆的装飾が、建築物の表層に現れ出たときに出来る。これは、建築家ルドゥにおける様々な局面（書物の文体、建築のコンポジションにおけるモチーフの組合せ方など）でのキメラ性の体现でもある。

第3部では、ルドゥの都市・建築構想のうちに、当時の身体や性をめぐる認識や権力性がいかに反映されているかを検討した。第1章では、建築による性の管理という契機を体现した「オイケマ」、すなわち男根型の平面図を持つ、青少年を結婚の美德へと導くための放蕩の館について論じた。このリベルタンの性的建築は、最終的には「美德」への醇化を企図しており、この捻れた道徳がルドゥの特徴をなす。

第2章では、「教育」や「労働」という、近代的な規律・訓練という側面と性的なニュアンスとを同時に含み持っていた概念が、ルドゥの理想都市案にいかん反映されているかを検討した。ルドゥの陰画というべきサドはこの二重性を巧みに利用したが、ルドゥの理想都市案にも同種の契機が現れ出ている。

第4部では、『建築論』が書物としての物理的構造や語りの形式において内包する、仮構的な空間性を分析した。「空間としての書物」には長い伝統が存在するが、ここではその中に『建築論』を位置づけつつ、その性質や特異性を抽出した。まず第1章では、書物におけるイメージの機能に着目し、ファサードとしての扉^{フロンテイスピース}絵の機能、およびイメージ（建築図面）とテキスト（本文）との関係を分析した。その結果、ルドゥにあつては扉^{フロンテイスピース}絵中央に描かれた内奥への視線を遮る緞帳や、イメージの明瞭さを裏切るテキストが、書物内に意味の宙吊りや両義性、不連続性をもたらしていることが明らかとなった。

第2章では、ルドゥの文章のナラティブ分析を行った。結果、そのテキストは異種混淆的で語りの主体も一貫しないという独自の性質を持つこと、「旅行記」としての語りが進展することで都市空間が描写されてゆくこと、理想都市への「旅程」がフリーメイソンの通過儀礼プロセスと重合することが明らかとなった。また、書物全体が暦としての時間性と、通過儀礼としての性質も併せ持つ「旅」を通して最後には「死」へと達する空間性とを有することが判明した。

続いて第3章では、本文中のイメージとテキストとの連続体が、どのように仮構的な空間性を生成させているかを、語り手の身体動作や知覚を示す表現と図版挿入のタイミングとの協働関係、章や節のタイトルが果たす旅程の「宿駅／留」としての機能、さらに連続体に穴を開ける「虫喰い」としての図版を取り上げ分析した。

第5部では、ルドゥによる建築家としての自己表象について分析した。第1章では、建築家とデミウルゴスとをアナロジーの関係で捉える言説の系譜と同時代性を明らかにしつつ、ルドゥがいかに自らの職業である「建築家」の仕事を世界創造のプロセスに準え称揚しているかを、『建築論』の記述から丹念に辿った。

第2章では、ルドゥの理想都市構想における、宇宙の秩序や太陽の象徴性の体現を分析した。大宇宙と小宇宙との照応という伝統的な発想と、都市や建築物の設計・配置による統治、「監視」の権力性といった18世紀後半固有の諸契機との重合が明らかとなり、宇宙創造者にして統治者たる「建築家」像が確認された。

第3章では、ルドゥにおいて「創造主としての建築家」イメージが、中央の眼＝太陽の象徴性と重ね合わされること、対象に浸透する視線が権力性のみならず性的含意も持つことを論証した。

上記の分析から、新たな言語創造者としてのルドゥが浮かび上がる。彼の建築構想は、文字そして書物として存在する。建築家であり思想家であり、そしてまた文筆家でもあったルドゥにとって、理想的建築・都市の構想が書物という形態をとることは必然であり、彼の建築と都市をめぐる思考はすなわち、文字と言語、語りについての方法論の模索だった。本論文が明らかにしたのは、このルドゥによるユートピア都市の書法に他ならない。